競技スポーツにおけるスポーツ用具の進歩に関する一考察 -LZR に着目して-

A study of the progress regarding sports instruments in competitive sports-focusing on the LZR-

1K10C044-2　市川　諒

主査　友添　秀則 先生　副査　リートンプソン先生

【序章】本研究の目的と方法

選手の競技力向上に、スポーツ用具は少なからず影響を与えてきた。しかし、競泳競技において競泳水着 LZR の着用が禁止となった。

競技力向上が目指されてきた中、特定のスポーツ用具が禁止されるという事態を引き起こしたLZRは何だったのかという動機により、本研究の目的は、LZR の問題点を文献研究により明らかにしていく。

【第１章】

水泳は、食糧確保、神事、教育・軍事目的と本来人間の生活に根付いたものであった。

しかし、次第に競技会が行われるようになり競技性が増すようになった。その一因となったのが、ピエールド・クーベルタンが提唱したモットー「より速く、より高く、より強く」つまり「卓越性」を掲げるオリンピックの競技種目に加わったことだと推察される。

国際大会に参加することにより日本を含め、各国、選手の競技力向上を泳法やトレーニング法など様々な視点で図るようになった。

【第２章】

規則ができた 1964 年から 1970 年代にかけて、泳法が主に規則で取り扱われた。1980 年代から 2006 年までは、施設についての規則が泳法とともに取り扱われたことが確認できた。

これらのことより、LZR が登場するまで、競泳水着は規定を設けるほど問題とされていなかったことが推察された。

【第３章】

競泳水着に関する規定がなかったゆえに、競泳水着に科学技術が次々に取り入れられたことが推察される。

LZR は、効能や 2008 年に着用した選手が数多くの世界記録を更新したことを考えると選手のパフォーマンスに大きく影響したことが確認できたが、日本の記録の変遷をみると、2000 年から 2008 年の世界記録が更新されなかった約 8 年間の期間も記録は短縮されていた。世界記録の更新だけをみると、確かにLZRは約８年記録が更新されなかった状況を打開した競泳水着ではあるが、日本の記録が年々短縮されている点や、規制されてなお、競技力向上のために競泳水着に工夫が凝らされ、記録も短縮されてきていることから、実際は、LZR が特別な競泳水着ではなかったのではないかという疑問が呈された。

【第４章】

先行研究の検討で、佐伯(2009)も小坂(2012)も、先行研究で共通して、競技力向上を図って開発されたスポーツ用具、または、LZR のように劇的に競技力向上をもたらすスポーツ用具は、公平性に関する問題を提起すると指摘していたが、競泳水着は、競技力向上を意図して開発されてきており、また、LZR は騒がれたほど劇的に競技力向上を図れたものではなかったことから、両者が指摘するほど問題を抱えていないと推察された。

また、新聞が「高速水着」や「魔法の水着」と称したが、第３章からLZRは特別な競泳水着ではないことが確認され、LZR はこれまで進歩してきた競泳水着の一つであると推察された。

【結章】

第４章で、LZR が先行研究で扱われているほど問題を抱えていないことが推察された。では、何が問題であったのか。それは、規則がなかった点であったと考えられた。中村(1995)は、規則の変容の理由の一つに「競技が、より対等、平等、公正に行われるようにする」と上げている。つまり、規則がなかったことで公平性の問題が提起され、公平性を担保するために規則を設けたのではないかと推察される。中村(1995)の言葉で表現すると「ルールの不備」がもたらした問題であるといえるだろう。

新聞やテレビなどで LZR は「水着問題」として取り上げられていたことにより、「ルールの不備」ではなく、LZR という「競泳水着」の側に問題があると世間が感じてしまったと考えることができる。

以上のことより、LZR をめぐる問題はLZR という「競泳水着」による公平性の問題ではなく、「ルールの不備」により生じた公平性の問題であったと結論付けたい。